

県模試

二〇二三年度 神奈川県高校入試模擬試験

国語

〈五十分〉

十二月号

注意事項

- 1 教室コード番号・受験者コード番号・氏名は、解答用紙の決められた欄にはつきりと記入しなさい。(コード番号は算用数字で、下の〈記入例〉のとおりに記入すること。)
- 2 解答用紙の「QRシール貼り付け欄」に自分のQRシールを貼りなさい。
- 3 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 4 問題は問五まであり、1ページから14ページに印刷されています。
- 5 解答用紙の決められた欄に解答しなさい。
- 6 数字や文字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はつきり書き入れなさい。
- 7 マークシート方式により解答する場合は、選んだ番号の○の中を塗りつぶしなさい。
- 8 解答用紙にマス目(例:

--	--	--	--

)がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 9 終了の合図があったら、すぐに解答をやめ、指示にしたがって解答用紙だけを提出しなさい。

〈記入例〉

1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問一 次の問いに答えなさい。

(ア) 次の a ～ d の各文中の——線をつけた漢字の読み方として最も適するものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | |
|-------------------|--------|--------|---------|
| a 準備万端である。(1 ばんたん | 2 ばんぜん | 3 まんたん | 4 まんぜん) |
| b 戴冠式が始まる。(1 いかん | 2 ていかん | 3 たいかん | 4 だいかん) |
| c 切手を貼付する。(1 はんぷ | 2 ちようふ | 3 せんぷ | 4 とふ) |
| d 他人を嘲る。(1 ののし | 2 あざけ | 3 たたえ | 4 あなど) |

(イ) 次の a ～ d の各文中の——線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- a セイリョウ飲料水を購入する。
- 1 ソウリョウが五百円かかる。
- 2 さまざまなチリョウ法を試す。
- 3 コウリョウたる風景が広がる。
- 4 一挙リョウトクの結果になる。
- b 日本人のキンセンに触れる音楽。
- 1 大都市のキンコウに住む。
- 2 子供がモッキン^キをたたく。
- 3 キンガクを確かめる。
- 4 「キンガ新年」と葉書に書く。

c 前任者のやり方をトウシユウする。

- 1 相手の要求をイッシユウする。
- 2 シユウチのあまり顔が赤くなる。
- 3 会議で非難のオウシユウになる。
- 4 クウシユウ警報が鳴り響く。

d 客に飲み物をススめる。

- 1 避難カンコクが発令される。
- 2 会見でイカン^キの意を表す。
- 3 書類のシンセイを行う。
- 4 三年生にシンキユウする。

(ウ) 次の俳句を説明したものとして最も適するものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

朝戸繰りどこも見ず只冬を見し

原 石鼎

1 朝、戸を開けるとともに目に入った一面の雪景色に対する驚きを、「どこも見ず」と焦点が合わない様子を強調しながら、読者の共感を促すように描いている。

2 朝、戸を開けたときに感じた寒さを、「冬」という季節を具体的な事物のように表現することによって、冬の厳しさが直接的に感じられるように印象深く描いている。

3 朝、戸を開けながら感じた冬の到来の気配と、季節が移行することへの言いようのない恐れを、「只冬を見し」という写実的な言葉を用いて淡々と描いている。

4 朝、戸を開けて部屋の上の空気を外気と入れ替えたことで得られた冬の日の爽快感を、「戸繰り」「見ず」と自身の行動をふり返りつつ描いている。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

母親の態度にいらいらしていた青葉一中の二年生の「あたし（八木原朋花）^{やはらともか}」は、自転車をとばして大きな公園にやって来た。そこで、同じクラスの優等生「沢田美咲」^{さわだみさき}と隣のクラスの「村元玲奈」^{むらもとれな}が、縄跳び（ダブルダッチ）をしているのを見つける。

ピシッ、パシッと軽快に地面を打つ縄は二本あった。その中をかくくぐるように美咲が跳ぶ。縄が二本ってことは、跳ぶテンポも二倍ということだ。跳び越したと思うとあつという間にもう一本が来る。美咲は縄に足を取られることもなく、軽々と跳ぶ。身体^{からだ}をひねって回転する。ひらりと回った時に、目が合ったような気がした。

その直後の動きを見た瞬間、あたしは固まった。たぶん、阿呆面^{あほうづら}で見てた。跳び手と縄の持ち手が鮮やかに入れ替わり、玲奈から縄を受け取った美咲は、少しもテンポを変えることなく、縄を変にたゆませることもなく、回し続けた。そして……。

縄の回転がにわかになる。それに合わせて玲奈が跳ぶ。すごく速い。片足ずつ交互に地面につくのだけれど、なんてスピードだろう。今までの倍速、いやそれ以上の速さで縄が回っているのだ。速い分、縄が形作る幅も高さも小さくなる。二本の縄がびゅんびゅんとうねるように低い位置で回転する中、やや身がかがめるようにして跳ぶ。軽快にスピーディに足を動かして、けっして縄に引っかけることがない。

スゲー！ こいつ、何なんだよ！

大きな力に引き寄せられるように、あたしは一步步づく。少し間をおいてまた一步步前に出る。

「玲奈！」

ふいに美咲が呼びかける。その声に反応して、玲奈はするりと縄から抜け出た。

「何だよ」

美咲は玲奈のほうを向いてから、あごをしゃくってみせた。その先には、あたしがいた。

「やってみる？」

挑発的な目で、だけどどこか脱力した姿勢の美咲が、あたしを見て言った。改めて奇妙なツーショットを見る。沢田美咲と村元玲奈、つまりエリートの黒い髪とヤンキーの茶髪は、好対照だった。やつぱり、なんで？ と思ってしまう。どうしたって結びつかない。くつきりした眉の美咲に、糸のように細い眉の玲奈が、同じ空間にいるなんて。でも、二人とも同じような膝丈のジャージに、Tシャツという姿だった。そして同じように上気した顔には、汗がしたたっている。

「知ってる子？」

と、玲奈が聞いた。あたしのことをまったく知らないみたい。そりゃあ、美咲みたいな有名人じゃないけど。

「八木原さんだよー、玲奈。C組の、八木原、朋花」

後ろのほうから声がした。振り返ると、二本の縄の端を抱きしめるようにして、ボブヘアの女の子が立っていた。E組の小塚玖美だ^{こづかくみ}。美咲と玲奈にばかり目を奪われていたけれど、考えてみれば縄を回すには二人必要だ。ということは、わたしがしばらく見ている間、玖美はひたすら回していたってこと？

おとなしい子だけど、たしか、玲奈のパシリっていうのか、いいように使われてるって噂の子じゃなかったかな。小柄な丸顔で、玲奈の名を呼びながら、追いかけていくのを何度か見た。話したことはない。たしか成績も普通で目立たない。特にかわいいうって子じゃないし、ブスってわけでもない。ちよつと不運だったのが、玲奈に目をつけられたこと……たぶん、多くの同級生はそんなふうに玖美を見ているのだろう。

「ふーん、青一^(注)なんだ。いいよ、やってみな」

どうでもいい、というふうに玲奈が言った。美咲がその場で軽くステップを踏む。やっぱり結びつかない二人だ。²悪い夢見てるような気がする。

玲奈は隣のB組の子で、いわゆる問題児っていうのか、欠席遅刻の常習者だった。同じクラスになったことはないけど、はっきり言えば近づきたくないタイプの子だ。喫煙が見つかったとか、他校の不良とけんかしたとか、悪い噂はずいぶん聞いている。目つきが鋭くて顔立ちがきつい。あの顔に睨^{にら}みつけられたら、ちよつと身がすくんでしまう。その玲奈と、我がクラスはもとより、学年でもトップの優等生の美咲が、仲良く縄跳びしてるなんて。

今日の美咲は教室とはずいぶん違う顔をしていた。いつもはきっちり三つ編みにしてる髪を結ばずに後ろに流していて、緩やかにウエーブがかかって見える。もつとも、前髪は汗でべったりと額に貼りついていたけど。服も、Tシャツにジャージだ。これまで、制服をきっちりと崩さずに着ている姿しか見たことはなかった。でも、着てるものとか髪の色いだけじゃない。たぶん、あたしはきよんととして、自分のとまどいを美咲に悟られてしまったのだろう。ずいぶんと人の悪そうな表情でにやにやしている。「せーのっー」

いきなり、玲奈の声が響く。つられるように美咲と玖美の手が動いた。さっきよりはちよつと遅いペースで、二本の縄は規則正しく地面を打つ。あたしは動きを目で追おうとするのだけれど、二本の縄のどっちを見ていたらいいのかもわからずに、ただ首だけを上下させていた。

「見てな」

玲奈がすつと前に出た。そして、その場で足踏みするように軽快な足取りで、縄を跳び越える。それから、またするつと反対側に抜け出た。そして縄の向こうから、やってみるとばかりに、あたしに向かつてあごをしゃくった。

「ゴー！」

美咲が声をかける。でも、足が動かなかった。どのタイミングで入れればいいのだろう。つかめない。前へ進もうと思っても、あつという間に二本目の縄がやってくる。焦^{あせ}った。大縄跳びなんて、小学生の時にさんざんやったのに。どっち回しだろうと、軽々と跳んでいたのに。そうは思っても、一本と二本とでは全然勝手が違うのだ。あたしはしばらくの間、回り続ける縄をむなしく目で追うことしかできなかった。

「片方の縄だけ見るんだよ。地面にあたって上がってくる前に跳び越すんだ」

^(注)ハスキーヴォイスで、玲奈が言った。頷^{うなづ}きながら、玲奈って子、こんな声だったんだ、なんて考えてるのがおかしい。思い切って、縄を跳び越す。越えたと思った。でも、縄はあたしの左足に引っかかり、動きを止めた。すぐにもう一本の縄が下りてきて、地面を打ってから止まった。

縄はけっこう激しくくるぶしの上のあたりにぶつかった。痛くはなかったけど、美咲にくすつと笑わ

れた。

「初めてなんだよ。あんただってなかなか入れなかったじゃんか」³

玲奈はそう言って、あごで玖美に合図した。

「せーのっ！」

今度は玖美が声をかけ、縄がまた回り始めた。

「両足で跳び越すんだよ。ワン、ツー、スリーで跳んで」

玲奈が言って、三人が声を揃える。スリーというかけ声に引っ張られるようにして縄を越えた。

入れた！

さっきの玲奈の跳び方を真似るように、縄をやり過ごす。速い。すぐに二本目が下りてくる。何回跳んだだろうか。ちよつとリズムがくるったと思った瞬間、また足に引っかけた。

「もう一回やってごらんよ」

玖美が言った。黙って頷く。今度も玲奈が合図をしてくれて、するりと中に入れた。

「タコ！ 寄っちゃだめだよ。真ん中で跳ぶ！ そうだよ、ああ、バカ、そんなに縮こまらないでいいんだよ。そうそう」

玲奈の言葉は乱暴だけどすごく的確で、まるでその声に操られるように場所や姿勢を直して跳んだ。さつきよりずいぶん長く跳んだところで、縄が足に絡んだ。縄から離れたあたしは、荒い息を吐いた。⁴
「けっこう疲れるね」

額にも頬にもうつすらと汗がにじんでいる。胸がどきどきする。でも、息が上がっているせいだけじゃない。何だろう、この高揚感ほ。

手の甲で汗をぬぐいながら、顔を上げた瞬間、強い西日が目に飛び込む。まぶしげに手をかざした。つられるように、美咲が夕日を振り返るのが見えた。

促されてまた跳んだ。少し慣れた。慣れるにしたがって、玲奈の合図は簡単になる。自分で縄を見ながら、小さなゴー！ という声に反応して中に入る。

初めてまわりを見た。空が見えた。木が見えた。美咲と目が合った。すべて、ほんの一瞬だった。

(中略)

「あんた、美咲の知り合いなの？」

「知り合いって……」

「C組だって言ったじゃん。美咲と同じクラスなんだってばあ。人の話聞いてないんだから、もう」と玖美が助け舟を出す。

「うぜえ。あんたに言われたら終わりだよ」

玲奈が毒づいたが、玖美はちよつと取り繕ったような笑顔を振り向けた。

「玲奈が始めたんだよ、ダブルダッチ。また一緒にやろうよお。今度は土曜だからねー」

ダブルダッチというらしい。初めて聞いた言葉だった。あたしは来るとも来ないとも答えず、ただ、⁵
曖昧な笑顔を返して自転車に乗った。

何で誘われるままに、やってしまったのだろう。縄跳びなんて、くだらない。小学生じゃあるまいし。それに美咲と玲奈？ 冗談じゃない。あのツーショットは驚きだけど、どっちの子とも関わりたくない。腹立たしいほどの超優等生と、ヤンキー娘だ。まあ、あの二人が親しいとしたら、これはちよ

つとしたスクープだな。でもそんなこと、だれが信じてくれるだろう。

公園を出てすぐに、スピードをあげる。またまた黄色信号で大通りを渡りきり、坂道に出た。下る時は、けつしてブレーキをかけてはならない。脇道から人が飛び出すかもしれない。車が出てくるかもしれない。でも、そんなことはかまわない。一気に下る。風を切って下る。そうすると、ほんの一瞬、むしろしゃしゃりした気分が晴れる。けれど、どうしてかな、爽快感が足りない。

後から考えた。ダブルダッチで、先に爽快になっちゃったのかもしれない。たかが縄跳び……そう思おうとした。けれど、あたしの頭に、何度も何度もよみがえる。玲奈の跳躍が鮮やかに浮かぶのだ。どうしたらあんなに軽やかに跳べるのだろう。跳んでみたいと思った。もつと、高く、もつと空を感じて。

(濱野 はまの 京子 きょうこ「フュージョン」から。)

(注) 青一Ⅱ青葉一中のこと。

ハスキーヴォイスⅡかすれた声。

(ア) — 線1「美咲は玲奈のほうを向いてから、あごをしゃくってみせた。」とあるが、そのときの「美咲」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 少しずつ近寄って来た「あたし」が自分たちのダブルダッチに強い興味を示していることが見て取れたので、仲間に入れてやろうと思い、それをしぐさで「玲奈」に伝えている。

2 自分たちの動きをじっと観察している「あたし」を見て、ダブルダッチをやりたいという意志を感じ、まずは「玲奈」に紹介した上で「あたし」への対応を考えようとしている。

3 ダブルダッチは未経験のはずの「あたし」がふらふらと近づいて来たことに驚き、いったん練習を中断して「玲奈」とともに「あたし」を聞いただそうと思っている。

4 ダブルダッチをしている最中にすぐ近くまで寄って来た「あたし」から自分たちに対する敵意のようなものを感じ取り、「玲奈」に警戒するよう訴えている。

(イ) — 線2「悪い夢見てるような気がする。」とあるが、そのときの「あたし」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 悪い噂が多く関わりたくないタイプの「玲奈」に自分のことを知られてしまったと思い、どうふるまえばよいか困惑している。

2 エリート「美咲」と問題児の「玲奈」が同じ場所にいて一緒に行動している状況をすんなりと受け入れられずにいる。

3 「美咲」と「玲奈」が親密にしていることにかすかな羨望を感じながら、そこに自分が入り込む余地はないと諦めている。

4 問題児の「玲奈」に目をつけられたら、自分も「玖美」のようにいいように使われるのではないかと不安になっている。

(ウ) — 線3「初めてなんだよ。あんただってなかなか入れなかったじゃんか」とあるが、こう言ったときの「玲奈」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 ダブルダッチをした経験がないとはいえ、跳び方があまりに下手な「あたし」にがっかりし、「美咲」に注意する形をとりながら「あたし」に嫌味を言っている。

2 縄をうまく越えられない「あたし」にうんざりしながらも、初対面の人間には文句を言いづらい

ため、八つ当たり気味に「美咲」に苦言を呈している。

3 いきなり足に縄をぶつけた「あたし」を見て、「美咲」も最初は下手だったことを思い出し、「美咲」につられて笑いそうになった自分自身を戒めている。

4 ダブルダッチをやったことがない「あたし」がうまく跳べないのは当たり前だと思っており、「あたし」への気遣いを示しながら、くすつと笑った「美咲」をたしなめている。

(エ) 線4「けっこう疲れるね」とあるが、ここでの「あたし」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 近寄りがたかった「玲奈」ともダブルダッチのおかげで友達になれそうだと感じ、喜びをかみしめているように読む。

2 ダブルダッチがうまくできないことに加え、「玲奈」に乱暴な言葉遣いをされたことから、いらだちを隠せないように読む。

3 ダブルダッチに悪戦苦闘しながらもなんとか皆のように跳べるようにになりたいという思いから、控え目に教えを乞うように読む。

4 初めてやったダブルダッチに夢中になり、長く跳ぶことができたうれしさから、気持ちが浮き立っているように読む。

(オ) 線5「曖昧な笑顔を返して」とあるが、そのときの「あたし」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 ダブルダッチは思いのほか楽しめたが、「美咲」や「玲奈」と親交を続けたいとは思えず、誘いに対してはつきりとした態度を示せずにいる。

2 「美咲」の挑発に乗ってダブルダッチに参加したあげく誰よりも夢中になってしまった自分を恥じ、次回もやりたいという本心を表せずにいる。

3 ダブルダッチの面白さをまた味わいたいが、「玖美」ではなく「玲奈」と「美咲」の意向を確かめなければ安易に誘いに乗ることはできないと、慎重になっている。

4 ダブルダッチが上手にできなかった自分を受け入れてもらえたことにうれしさを感じつつも、「玲奈」たちの輪に入っていく勇気がなく、笑ってごまかそうとしている。

(カ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。
1 ダブルダッチを体験したことで気が合わない人間との付き合い方を学んでいく「あたし」の様子を、「あたし」の視点でとらえた登場人物の描写とともに描いている。

2 敬遠していた「玲奈」と仲良くなりたいという気持ちがダブルダッチを通して強まっていく「あたし」の揺れ動く心情を、「あたし」の回想を交えて描いている。

3 ダブルダッチに心を奪われながらも、それを素直に認めてしまうことに抵抗感をもつ「あたし」の内面を、地の文にも話し言葉を用いながら描いている。

4 ダブルダッチをする「美咲」と「玲奈」の姿から、見た目で人を判断していた自分の浅はかさを感じていく「あたし」の姿を、三人の会話を中心に描いている。

問三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

科学はなぜ信頼できるのでしょうか。信頼の根拠は、科学者たちが専門家集団として客観的な根拠をもとにしっかりとした議論を積み重ねているはずだと考えられるところに求められるように見えます。人文学も「人文科学」と呼ばれたりしますが、「科学」という言葉が「客観的な議論の積み重ね」を基礎とするものを意味すると、人文学は果たして「科学」なのか、という疑問がしばしば呈されます。例えば哲学などは、少なくとも一般的なイメージでは、それぞれの哲学者が「自分の考え」を述べるだけで一向に話が積み上がらないものと考えられているように思います。そこには「進歩」という概念が欠けているというわけです。

「科学」はそうではなく、科学者たちが共同で客観的な知を積み重ねるものであって、そちらの方がよっぽど信頼できるといわれます。誰かが恣意的に設定したルールの上に成立するものではなく、同じ知の基盤の上で客観的な議論を積み重ねているのだから、素人^{（注）}がその内容の一々について専門的な知識^Ⅰをもっていない^Ⅱでも、十分に信頼できると見なされるのです。

² 科学者たちの現場にもう少し近寄って見れば、その信頼の基盤は、より強固なものになるでしょう。科学者が「科学者」として認められるには、専門研究でしっかりとした業績を上げ、承認を受けなければなりません。論文を発表する専門誌は、ピア・レビュー形式を採用するのがほとんどで、掲載の可否を決定するのはその道の専門家です。専門家が専門家としてきちんと評価できる論文以外は、科学者の「業績」としてカウントされません。この専門家によるチェック機能が、科学は信頼に足るという確信をより確かなものにしてくれます。論文の内容について素人には判断できなくても、専門家が競争原理に基づいて互いにチェックしている体制があるのだから、信頼に足ると思えることができる、というわけです。しかし本当にそうでしょうか。そうした「専門性」はなぜ無条件に信じられるのでしょうか。トーマス・クーン（一九二一―一九六六年）という科学史研究者の議論を参照してみましょう。ここでも歴史を振り返ることが重要です。今日私たちがよく知っている高い専門性に依拠した研究体制は、クーンによれば、科学の普遍的なあり方ではありません。それは「通常科学」と名づけられる特殊な状態だといわれるのでした。通常科学とは、クーンによれば、すでに出来上がった「パラダイム」を前提にした上で展開される「科学」だといわれます。パラダイムとは、科学研究において科学者に共有されている規則や基準のことです。通常科学は、パラダイムを前提にした上での「パズル解き」にすぎず、それによって新しい考え方をもたらすことはない^Ⅲとクーンは主張しました。こうしたクーンの議論は、一見すると「科学」に対する信頼を揺るがす大胆な批判のようにも聞こえます。あるいは単に悪意をもって外野から投げられるナイフのようなものにすぎないと思えるかもしれません。

しかし、クーンの議論は、科学者たちから現場をよく分かっているとして支持されました。クーンがいうことの方が、科学者の実態に近いと見なされたのです。もしそうだとすれば、専門外の人間は実際には何を信頼しているのでしょうか。クーンのいう「通常科学」の内実をもう少し立ち入って見ていくことにしましょう。

今日の科学プロジェクトは、しばしば大きなお金と大掛かりな装置を必要とします。しかし、失敗する可能性もあるものに思い切った大きなリソースを割くことには、ふつうリスクが伴います。無駄になるかもしれないのに、そんなお金と労力が費やせるかというわけです。しかし、通常科学には、広い意味ではそのリスクは存在しません。巨額の装置の導入は「それを使えば重要な事実を見つけられる、とパラダイムが保証するから、研究者たちが取りかかるとなるもの」になっているからです。パラダイムを前提にする限り、こういう結果が出なければおかしいという「予測」があります。そのとき、パラダイム自

体の正しさは前提になっていて、吟味の対象にはなりません。

そのようなかたちでパラダイムの「正しさ」が確信されている状態であれば、どれほど巨額の予算をかけた実験でも決して無駄になることはありません。仮に実験結果がパラダイムの予測に合致しなかったとしても、「なぜそうなったのか」という新たな課題が見出された^{みいだ}と考えられるからです。予測と結果の不一致は、パラダイムを疑うことに向けられるのではなく、パラダイム上の検討課題を増やすことになります。そこでは実験の失敗もまた広い意味で科学の「進歩」に貢献したものと見なされるのです。

A、そのときの「進歩」とは、どういふものなのでしょうか。通常科学がパラダイムを前提にして浮かび上がる予測を実際に確かめるものとすれば、「答え」はあらかじめ与えられているとも考えられます。「答え」が与えられている問題を解くことは「進歩」といえるのでしょうか。「通常科学」が、あらかじめ設定された「答え」に^た辿り着くための努力である限りにおいて、それは「パズル解き」と同じだとクーンがいうのも、そのためです。ルールが設定され、解答があることを保証された問題を解く科学者は、問題設定に悩む必要がありません。彼らはただ、パズル解きの速さを競うだけです。だとすれば科学の「進歩」と呼ばれるものは、パラダイムを下絵にしたジグソーパズルのピースを埋めていくようなものになるでしょう。そこでは、下絵自体を書き換えることは想定されていません。ゲームのルール自体を変えれば、個々の科学者の研究の「意味」は宙に浮いてしまいます。ジグソーパズルのピースは、それだけでは絵をなさないのです。

かといってパラダイムの下絵がない状態で与えられたピースを組み上げることで何らかの「絵」をつくらることができるかといえば、それも困難といわざるをえません。「科学者」になるための訓練に、そうした能力を養うことは含まれていないからです。⁴「通常科学」の問題がパズル解きだとすれば「科学者」になるために必要なのは、パズル解きの訓練になります。より早くパズルを解く能力を身につけるには、パラダイムの正しさを検証して知を積み上げる訓練より、パラダイムを前提にした上で効率よく学ぶことを優先されます。実際、科学者になるための教育には主に「教科書」が用いられ、その分野を基礎づけるような独創的な科学論文が使われることはありません。基盤となる知をそれぞれの科学者が自分で確かめながら進むより、その正しさを前提とした上で系統的に学ぶ方が、学習効率が高いと見なされるのです。

(中略)

「科学」への信頼の基盤は、専門家同士の相互チェックに見出されると先にいいました。しかし、そこでの「専門家」とは、特定のパラダイムを共有する科学者集団を意味しています。クーンがいうように、科学者たちは「個人の創造的仕事、自分の同業者に対してのみ向けてなされ、仲間うちだけで評価される」というような職業集団⁵を形成します。その「仲間うちの評価」が、専門家同士の相互チェックと呼ばれるものの正体なのです。B、科学者たちが馴れ合^ないで論文の審査をしているということではありません。科学者たちはむしろ、通常科学のパズル解きの中で互いに競争しながら、互いの成果を評価しているといえるでしょう。

しかし、その高い専門性は、見方を変えれば、分野外の批判から専門家を守る働きをしているようにも見えます。その分野で前提にされる知の枠組みは、内部で問われることがないだけでなく、外部からの批判も受け付けないものになっているのです。通常科学の営みは、専門の枠組みに閉じることで効率化するような体制の中で行われているのです。

そうしたかたちでの知の蓄積は、⁵パラダイム自体の変化に対する強い「保守性」を発揮することになるでしょう。パラダイムの上に積み重ねられた知は、パラダイムの枠の中で意味づけられるものだから、

自分の研究の「意味」を失わせるような研究は容易に受け入れることができなくなります。専門家間のピア・レビューのシステムは、この点に関しては、大きなマイナスとして作用するほかありません。自分たちの拠^よつて立つ知の基盤を吹き飛ばすような革新的な論文は、「専門家」にとつては「とんでもないもの」としか評価できないのです。「科学者」としての業績が専門家間のチェックにのみ依存する体制を採る限り、そのような革新的な論文を書く人は最初から「科学者」として認められないことになるでしょう。パラダイムを前提にした科学の「進歩」は、その意味で、パラダイム自体を変化させていく知の更新をもたらすものへの本質的な反発をもつものになっているのです。

(あらや だいすけ) 荒谷 大輔「使える哲学 私たちを駆り立てる五つの欲望はどこから来たのか」から。

(注) 恣意的＝思いつきで行動するさま。論理的な必然性がないさま。

ピア・レビュー＝その分野の専門家が、研究や論文などを評価すること。

リソース＝資産。資源。

(ア) 本文中の A・B に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|-----|---|---|-----|---|------|
| 1 | A | つまり | B | やはり | 2 | A | では | B | もちろん |
| 3 | A | たとえば | B | だから | 4 | A | しかし | B | さらに |

(イ) 本文中の~~~~線Ⅰの語と同じ熟語の構成になっている語を、次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | 予報 | 2 | 給食 | 3 | 創作 | 4 | 需給 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|

(ウ) 本文中の~~~~線Ⅱの「から」と同じ意味で用いられている「から」を含む文を、次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | |
|---|--------------|---|------------|
| 1 | 寝不足から体調を崩す。 | 2 | 窓から光が差し込む。 |
| 3 | 水は水素と酸素からなる。 | 4 | 先生から指導される。 |

(エ) ———線Ⅰ「人文学は果たして『科学』なのか、という疑問がしばしば呈されます。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 人文学の専門家たちは、専門分野の研究に没頭するだけで、科学の「進歩」という概念に関心を示そうとしないから。

2 人文学に詳しくない素人から見ると、人文学の専門家たちの議論は、知識ではなく思想の積み重ねに見えるから。

3 人文学の専門家たちは、自らの考えをお互いに述べ合っているが、真剣に議論を戦わせているわけではないから。

4 人文学においては、専門家たちが自らの考えを述べるだけで、客観的な議論の積み重ねになっていないように見えるから。

(オ) ———線Ⅱ「科学者たちの現場に……より強固なものになるでしょう。」とあるが、なぜそのように言えるのか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 科学者たちの現場を知れば、同じ分野の研究をしている専門家の相互チェックにより信頼性が保証されていることが理解できるから。

2 科学者たちの現場を知れば、科学者が論文を作成する際には常に複数の人間が関わっていることが理解できるから。

3 科学者たちの現場を知れば、科学者は論文を相互にチェックすることで専門家としての知の基盤を共有していることが理解できるから。

4 科学者たちの現場を知れば、科学者は専門分野で業績を重ねることで初めて一人前と認められることが理解できるから。

(カ) —線3「通常科学には、広い意味ではそのリスクは存在しません。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 パラダイムを前提にしている通常科学では、プロジェクトにどれだけの予算や装置を使ったらリスクが発生するのが前もって予測できるから。

2 今日の科学プロジェクトは、研究を行う科学者と研究の予算と装置を用意する人間とは別なので、科学者は失敗を気にする必要がないから。

3 通常科学においてはプロジェクトの結果が予測と違ったとしても、パラダイム上の検討課題を増やすという意味では無駄でなく、科学の進歩につながると見なされるから。

4 巨額の予算と大掛かりな装置を必要とする科学プロジェクトにおいては、失敗した場合にとるべき措置が事前に準備されているから。

(キ) —線4「『通常科学』の問題がパズル解きだとすれば」とあるが、「通常科学」と「パズル解き」の共通点として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 問題が複雑化するのに比例して、正答を導き出すまでの困難が増える点。

2 正しい答えに辿り着くまでの手順が一つしか定められていない点。

3 何らかのヒントが与えられていないと、正答を見つけるのが難しい点。

4 答えがあらかじめ設定されていて、その答えに至る速さが重視されている点。

(ク) —線5「パラダイム自体の変化に対する強い『保守性』を発揮する」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 パラダイムが変化しても、自分が前提にしているパラダイムの枠の中で意味づけられる知のみを認め、それ以外の知は排除すること。

2 パラダイムの変化をふまえ、自分とは専門分野が異なる科学者やその研究成果に対しては批判を控えるようになるということ。

3 パラダイムが変化したことを認識できないまま、長年行ってきた専門家間のピア・レビューのシステムに固執すること。

4 パラダイムの変化に反発する科学者集団の一員として、従来の枠組みの中で創造的仕事を成し遂げることを目指すということ。

(ケ) 本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 通常科学を過信しパラダイムの正しさを疑わないことの危うさを指摘した上で、検証を経ずに安易に結論を出す現代社会の風潮について論じている。

2 科学の信頼性について説明した上で、パラダイムを前提にしている通常科学の「進歩」は本当に科学の進歩と言えるかという問題について論じている。

3 科学の信頼性を保証するパラダイムの意義について述べた上で、新たなパラダイムを構築しようとする現代の科学者の努力も評価するべきだと論じている。

4 通常科学の依拠しているパラダイムの正しさに疑問を投げかけた上で、パラダイムの枠からはみ出した研究も正当な評価を受けるべきだと論じている。

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

これも今は昔、多田満仲のもとに猛く悪しき郎等^(注)ありけり。物の命を殺すをもて業^(仕事)とす。野に出で、山に入りて鹿を狩り鳥を取りて、いささかの善根^(善行)する事なし。ある時出でて狩する間、馬を馳せて鹿追ふ。矢をはげ、弓を引きて、鹿に随ひて走らせて行く道に寺ありけり。その前を過ぐる程に、きと見やりたれば、内に地蔵立ち給へり。左の手をもちて弓を取り、右の手して笠を脱ぎて、いささか帰依の心をいたして馳せ過ぎにけり。

その後いくばくの年を経ずして、病つきて、^(数日間非常に)日比よく苦しみ煩ひて、命絶えぬ。^(あの世)冥途^(めいど)に行き向ひて、

閻魔の庁に召されぬ。見れば、多くの罪人、罪の軽重に随ひて打ちせため、^(ひどく責められ)罪せらるる事といみじ。

我が一生の罪業^(ざいごふ)を思ひ続けるに、^(注)涙落ちてせん方なし。

かかる程に、一人の僧出で来たりて、のたまはく、「汝を助けんと思ふなり。早く故郷に歸りて、罪を

懺悔すべし」とのたまふ。僧に問ひ奉りて曰く、「これは誰の人の、かくは仰せらるるぞ」と。僧答え給

はく、「我は汝鹿を追うて寺の前を過ぎしに、寺の中にありて汝に見えし地蔵菩薩なり。汝罪業^(ざいごふ)深重なり」と。僧答え給

といへども、いささか我に帰依の心の起りし功によりて、吾いま汝を助けんとするなり」とのたまふと思ひてよみがへりて後は、殺生を長く断ちて、地蔵菩薩につかうまつりけり。

(「宇治拾遺物語」から。)

(注) 多田満仲＝源満仲。平安時代中期の武将。

地蔵＝地蔵菩薩。

帰依の心＝神や仏などを信じ従う心。

閻魔の庁＝閻魔大王が、死者の生前の罪惡を調べ裁く所。

罪業＝罪となる悪い行い。ここでは殺生を指す。

(ア) —線1「涙落ちてせん方なし。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 生前に犯した罪を償うためとはいえ、罪の軽重にかかわらず責められている罪人たちを見て、気の毒になったから。

2 冥途に来て閻魔大王に会ったことで、生前の自分がどれほど残酷な罪を犯してきたのかを初めて理解したから。

3 生前に行った罪深い行為の数々を振り返れば自分が厳しい罰を受けることは間違いないだろうと思われたから。

4 多くの罪人が生前の罪を認め、過酷な罰を甘んじて受け入れていることを知って、そのいさぎよさに感動したから。

(イ) —線2「汝を助けんと思ふなり。」とあるが、こう言ったときの「僧」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 生前の「郎等」が、わずかではあるが「地藏菩薩」に信心を示したことがあったので、罰は与えず助けてやろうとしている。

2 冥途に来た「郎等」が涙を流して悔い改めていたので、十分に罪を償ったと判断し、罰を免除しようとしている。

3 生前の「郎等」が狩りの途中で一頭の鹿の命を助けたことがあったので、その優しさに免じて罰を軽くしてやろうとしている。

4 「郎等」が、冥途に来る途中で自分の笠を脱いで「地藏菩薩」にかぶせたので、その恩に報いて罪を帳消しにしようとしている。

(ウ) —線3「汝罪業深重なり」とあるが、どんなことを指してこう言っているのか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「郎等」が多くの罪人の悪口を言い、さんざん責められたこと。

2 「郎等」が「地藏菩薩」の目の前で無益な殺生を行ったこと。

3 「郎等」が悪事を重ねて、主君である「多田満仲」の名を汚けがしたこと。

4 「郎等」が野や山で狩りをして、生き物の命を奪ってきたこと。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「郎等」は、寺の「地藏菩薩」に対して信心を示さなかったために病気になる、死んだあとは冥途に送られた。

2 「郎等」に命を助けられた鹿の願いが「地藏菩薩」に届いたことによって、「郎等」はもとの世界に戻ることができた。

3 「地藏菩薩」のおかげで生き返ることができた「郎等」は、生き返ったあと、「地藏菩薩」に対する信心を忘れなかった。

4 狩りの途中で「地藏菩薩」を見かけた「郎等」は、冥途で罰を受けることを恐れて、殺生をやめることを誓った。

問五 中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんの四人のグループは、「総合的な学習の時間」で地産地消について調べ、話し合いをしている。次の資料、グラフ1、グラフ2と文章は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

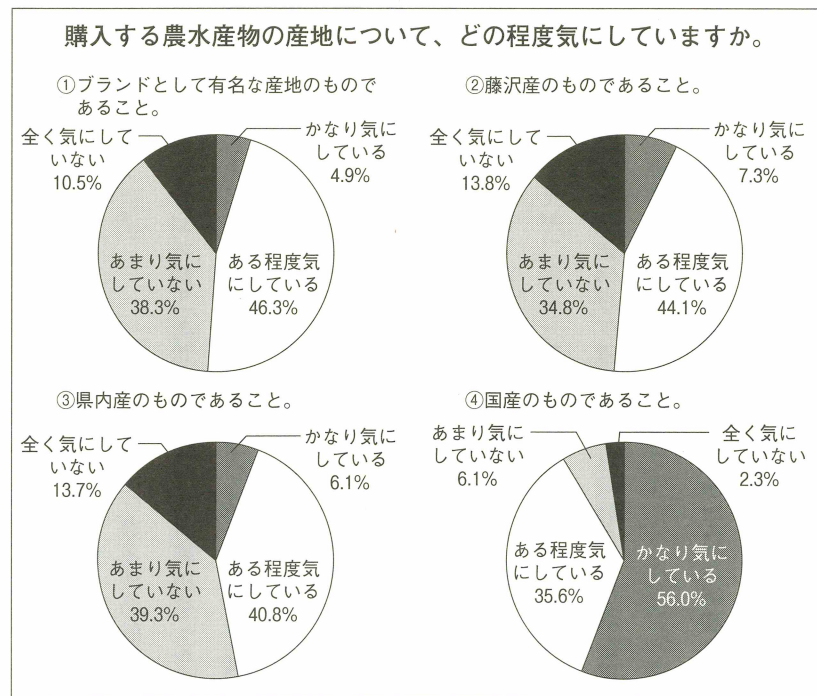
地産地消とは、その地域で生産された農林水産物を、その地域で消費することを通じて、消費者と生産者が互いの距離を縮めようとする取り組みのことです。消費者の、より安全・安心な農林水産物が欲しい、より良いものを選びたいという要求の高まりから、「地産地消」の取り組みが各地域で活発に行われています。

また、国（農林水産省）では、「地産地消」が地域の消費者のニーズに合ったものを地域で生産するという側面もあることから、「地域の消費者ニーズに即応した農業生産と、生産された農産物を地域で消費しようとする活動を通じて、農業者と消費者を結び付ける取り組み」と位置付けています。

（農林水産省東海農政局ウェブページ「地産地消を知っていますか？」より作成。）

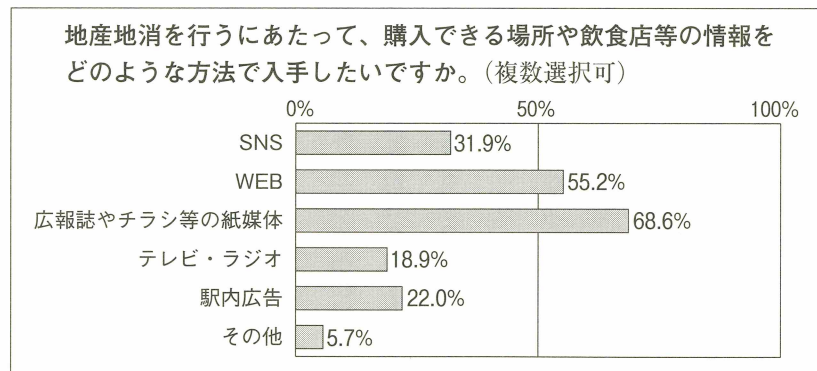
資料

グラフ1



藤沢市「令和4年度 地産地消に関するアンケート結果」(2023年)より作成。

グラフ2



横浜市環境創造局農業振興課「令和元年度 農畜産物の地産地消に関するアンケート」より作成。

Aさん

最近話題のSDGsについて調べていると、地産地消という言葉をよく見かけます。今日は、地産地消について、それぞれが調べてきたことをもとに考えましょう。

Bさん

まずは、資料を見てください。地産地消とはどのような取り組みかが書かれています。地産地消とは、簡単に言えば、その土地でとれたものをその土地で消費することで、各地域では、「生産者による直売所での農産物の提供」や「スーパーマーケットにおける地産地消コーナーの設置」「地元のプロducerと消費者との交流」などが行われています。

Cさん

生産者と消費者の結び付きを強めるために、多くの人がさまざまなことに取り組んでいるのですね。この取り組みは、順調に進んでいるのでしょうか。

Dさん

グラフ1を見てください。藤沢市民に対して、農水産物を購入するとき、どの程度産地を気

にしているかをアンケート調査したものです。これを見ると [] ことがわかります。

Bさん 地域に対するこだわりはあまりないようですが、国産かどうかを気にしている人は多いようですね。

Aさん これを見ると、自分が住んでいる地域の生産物を積極的に購入しようという意識があまり感じられないのですが、地産地消を広める方法に問題はないのでしょうか。

Cさん グラフ2を見てください。横浜市民に対して、地産地消に関する情報をどのような方法で入手したかをアンケート調査したものです。これを見ると、情報を紙媒体で手に入れたという回答が最も多いことがわかります。

Dさん 今は、SNSやWEBなどを利用して情報を手に入れる消費者が多いのかと想像していたので、この結果は意外でした。

Bさん 「テレビ・ラジオ」や「駅内広告」も一定数の要望があり、無視してよいほど数値が低いわけではありません。情報を発信する側は、インターネット偏重にならず、多様な方法で伝えることが大切ですね。

Aさん では、ここまでの話をまとめていきましょう。資料とグラフ2から読み取ったことをもとに考えると、地産地消を浸透させるためには、[] が必要です。次回の話し合いでは、より具体的な方法を考えていきましょう。

(ア) 本文中の [] に入れるものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「国産のものであること」よりも「ブランドとして有名な産地のものであること」のほうを気にしている人が多い

2 「藤沢産のものであること」や「県内産のものであること」を「かなり気にしている」人は、一割未満にすぎない

3 「藤沢産のものであること」を「かなり気にしている」人は、「国産のものであること」を「かなり気にしている」人の十分の一以下である

4 四つの質問のうちで、「あまり気にしていない」「全く気にしていない」の合計が最も多いのは、「藤沢産のものであること」である

(イ) 本文中の [] に適する「Aさん」のことを、次の①～④の条件を満たして書きなさい。

① 書き出しの [] 地産地消を浸透させるためには、 [] という語句に続けて書き、文末の [] ことが必要です。 [] という語句につながる一文となるように書くこと。

② 書き出しと文末の語句の間の文字数が二十五字以上三十五字以内となるように書くこと。

③ 資料とグラフ2からそれぞれ読み取った内容に触れていること。

④ 「結び付き」「方法」という二つの語句を、どちらもそのまま用いること。

(問題は、これで終わりです。)